

# ゲラルド・マローネとナポリの未来派<sup>1)</sup>

土肥 秀行

## 1. 序——複数形の未来派

フィリッポ・トンマーゾ・マリネッティ (Filippo Tommaso Marinetti, 1876-1944)の手による「未来派宣言」(*Manifeste du futurisme*, 1909年2月20日付『ル・フィガロ』«Le Figaro»に仏語版を発表)における誕生から、ちょうど1世紀をむかえた2009年をピークに、近年あらためて未来派は多くの関心を呼んだ。これを再考の機ととらえた向きにおいては、マリネッティら第1世代を中心としたひとつの同心円を描く既存の未来派のイメージに抗して、地理と時代に幅のある複数の未来派像 (futurismi) が提起される。つまり多様性といえ、これまでは未来派と、他の前衛諸派との関係において意識されていたのだが<sup>2)</sup>、最近では未来派そのものの内に複数性なり多様性なりが見出されるようになった。

これまで複数形の未来派が意識された機会として、まずは、多くの関連書や展覧会によって未来派のリバイバルが進んだ1986年に、改装されたばかりのヴェネツィア市パラッツォ・グラッシで催された展覧会「未来派と未来派」(*Futurismo e futurismi*)が挙げられる<sup>3)</sup>。未来派誕生から100年の際には、アオスタで複数形の「未来派」(*Futurismi*)との展覧会が開かれた(2008-09)<sup>4)</sup>。これらにおいては、著名な中心メンバーだけではなく、周縁に位置するマイナーな詩人や芸術家にも目がむけられている<sup>5)</sup>。

加えて現在では、歴史的な前衛の時代を経て体制と共に歩んだ未来派をタブー視する第二次大戦後の傾向が薄まっている。よって「航空絵画」(aero-

pittura)で知られる後期未来派についても関心が高まり<sup>6)</sup>、2009年にボローニャでは、地元出身の画家タートやカヴィリオーニの「航空絵画」作品をそろえた展覧会が開催された<sup>7)</sup>。

こうした最近の流れにおいては、1910年代半ば以降のイタリア国内の未来派をめぐる状況の多様性、特に地域性が浮き彫りになってきた。未来派といえ、ミラノ、フィレンツェ、ローマといった都市中心の文化活動ととらえられがちであったが、南部の諸分派についても再評価が進み<sup>8)</sup>、特にナポリにおける興隆は広く知られるようになった。かつての欧州有数の文化都市ナポリも、20世紀のはじめには周縁化が進み、それでもまだ1910年代においては、文化誌を舞台とする種々の芸術運動が活況を呈していた。未来派だけではなく、広い意味でのポストヴォーチェ派の前衛全体を見返していくなかで、1970年代末には、ナポリ未来派の再発見にむけた研究がはじめられていた<sup>9)</sup>。

それぞれは小規模ながらも活発であった複数の前衛のあいだには、様々な交流が生まれることになった。メジャーとマイナーのあいだや、またはマイナーとマイナーのあいだ（同地方内でも遠隔地どうしても）など、その結びつきは様々である。熱心な媒介者として、未来派関連では現在最大の規模を誇る私設資料館（在フィエゾレ）にその名が冠されたフィレンツェの画家プリモ・コンティや、本稿で紹介するゲラルド・マローネ（Gherardo Marone, 1891-1962）がいる。マローネについての資料を収蔵する2つの施設、ナポリ国立図書館手稿部門「マローネ資料館」（Archivio Marone, 遺族から寄贈された資料で1995年に創設）と、ローマ大学ラ・サピエンツァ校の文哲学部付属「20世紀資料館」（Archivio del Novecento）内「マローネ文庫」（Fondo Marone, 1999年から2004年にかけて集められた資料からなり、主にインターネット上で公開）にわかれる書簡中心の資料<sup>10)</sup>と、先行研究<sup>11)</sup>をもとに、本稿ではまずゲラルド・マローネの日本における初の本格的紹介を行い、次いでローカルな未来派と、ナポリの初期前衛との関係性について考察してみ

たい。

## 2. 文学史におけるゲラルド・マローネ

1910年代にナポリで発行されていた雑誌のなかで、前衛の牽引役となったのが『ラ・ディアーナ』（«La Diana», 1915-17）である。1915年1月から1917年3月までに25冊を数え、1918年には特別号『アントロジア・デッラ・ディアーナ』（*Antologia della Diana*）<sup>12</sup>が編まれた。主宰していたのが、ナポリの文人サークルの中心にいたゲラルド・マローネであった<sup>13</sup>。

青年期に詩作を嗜み、特に『ラ・ディアーナ』の初年度である1915年にはよく韻文作品を発表したものの（多くの場合、異名を使用）、次第に評論と創作散文、翻訳に勤しむようになる。『ラ・ディアーナ』を通じた前衛の季節が終わると、1930年代のブエノス・アイレス移住（生地への帰還）を経て、イタリアではスペイン文学者、アルゼンチンではイタリア文学者として、主に歴史的名著を翻訳しつつ、旺盛な紹介活動を行った<sup>14</sup>。

マローネの名が、文学史的な重要性をもつのは、2つの交友によってである。それは20世紀のイタリア詩を代表するジュゼッペ・ウンガレッティ（Giuseppe Ungaretti, 1888-1970）と、戦前の日伊関係に文化的にも政治的にも影響力をふるった下位春吉（1883-1954）のそれぞれとのあいだに結ばれている。後年政治的信条の違いが生じて、前者との友情は変わらぬまま生涯続いたが、後者との場合はそうはいかず、結局5年に満たない仲であった。その終焉において、下位とマローネ間が疎遠になるにつれ、下位とダンヌンツィオは接近していったのだった<sup>15</sup>。

マローネとウンガレッティの交流のきっかけは、この兵隊詩人が、マローネに導かれ『ラ・ディアーナ』に投稿しはじめ、次第に処女詩集『埋もれた港』（1916）の執筆と編纂へと方向付けられていったことにある<sup>16</sup>。マローネの死後、『ゲラルド・マローネへの前線からの手紙』（1978）の出版により、その文学的寄与が知られるようになった。これは現在もおウンガレッティ

の初期作品研究にとって欠かせない資料である<sup>17)</sup>。

マローネと下位春吉は、共同で日本の歌人を訳している。まず『ラ・ディアーナ』誌上でいくつかの翻訳を発表(1916)、それからアンソロジー『日本の詩』(*Poesie giapponesi*)にまとめた<sup>18)</sup>。この同時代の『明星』の一派を特集する欧州初のアンソロジーにおいて、現在ヨーロッパで日本の詩を代表するまでになった与謝野晶子の西洋語への初翻訳が果たされた。出版から2年後にまとめられたリストによれば、イタリア全土とパリで発表された書評数は24にのぼり<sup>19)</sup>、高い注目度は、未来派詩人による偽作ではないかという疑惑を巻き起こすほどであった<sup>20)</sup>。『ラ・ディアーナ』上での日本詩への接近ゆえに、ウンガレッティへの影響も度々議論されることになる<sup>21)</sup>。

10年後、『日本の叙情詩人たち』(*Lirici giapponesi*)とタイトルを改変した上で増補第2版が出たのは、初版の評判ゆえというよりも、当時広まりつつあった純粹詩運動(イタリアではエルメティズモの詩人たちが担っていく)の範疇でとらえうる異国の「叙情詩人」(*lirici*)のなかで、同時代の日本詩人の意義も、あらためて吟味しうるようになったためである<sup>22)</sup>。

### 3. 『ラ・ディアーナ』とその他のナポリの文芸誌

ここから、マローネが活躍の舞台とした、自ら主宰する『ラ・ディアーナ』(1915-17)が、同時代の他のナポリの文学雑誌との関係を検討していく。全国的に前衛が興隆する時代に、ナポリのローカルな状況が活力とヴァラエティに富むこと、そしてなかでも『ラ・ディアーナ』が独自性をもつとともに、多義的でもあることを確認するためである。

先行する全国区の『ラ・ヴォーチェ』と『ラチェルバ』(*«Lacerba»*, 1913-15)の流れを継ぎ、ナポリにおいて、いち早く未来派を紹介していた『ヴェーラ・ラティーナ』(*«Vela latina»* “大三角帆”, 1913-18)と、日本文学なども扱っていた『エーコ・デッラ・クルトゥーラ』(*«Eco della cultura»* “文化の残響”, 1914-17)を意識しつつ、『ラ・ディアーナ』は創刊された。それは参戦へと

緊張の高まる 1914 年末から 1915 年初頭にかけてのことである。

実際、『エーコ・デッラ・クルトゥーラ』は、『ラ・ディアーナ』に 2 年先駆け、ナポリで日本語詩を紹介し、様々な外国文学に目をむけるエキゾシズムのもと「断片派」(frammentismo) の流れを後押しし<sup>23)</sup>、後続誌『ヴェーラ・ラティーナ』でも活躍する詩人(カンジュッロ、フィウーミ、チェルヴィ)の参加をみるなど、先駆的な雑誌であった。

『ヴェーラ・ラティーナ』は、当時のナポリ文学界の重鎮である方言詩人フェルディナンド・ルツの手で 1913 年 12 月に創刊され、1915 年から 16 年の 2 年間、ナポリ出身のフランチェスコ・カンジュッロ (Francesco Cangiullo, 1884-1977) 監修で、未来派詩人たちの「自由態にある語」(parole in libertà) を中心とした連載「未来派面」(*Pagine futuriste*) を掲載した。そのコーナーには、マリネッティ、プラテッラ、ゴヴォーニ、フォルゴレ、バッラといった未来派運動の中心人物から、ブツツイ、マツツア、ヤンネリといった若手まで登場した。グラフィック性の高い「自由態にある語」が大きく第 1 面に刷られていたこともあって、今日までナポリ未来派を代表する雑誌とみなされている<sup>24)</sup>。

『ラ・ディアーナ』の同人として、実質編集長を務めるマローネを支えることになるリオネッロ・フィウーミやアウロ・ダルバといった詩人も、一時期、『ヴェーラ・ラティーナ』に寄稿していた。すでにフィウーミは「自由派」(liberismo)<sup>25)</sup> という、未来派とは異なる独自の自由詩運動を推し進めていた。ダルバは、大きな括りのなかでは未来派に含められる<sup>26)</sup>。前衛のなかでも未来派ほど過激ではない 2 人は、自らの場所を求めて『ラ・ディアーナ』に合流することになった。『ラ・ディアーナ』の 2 年目 (1916) においては、フィウーミがマローネと並んで編集指揮にあたり、執筆陣の拡大を目指し、著名人に接触し寄稿を依頼する方策へと転換していった。すでに『ヴェーラ・ラティーナ』で幾度となくとりあげられていた未来派詩人マリネッティ、カッラー、パピーニ、ゴヴォーニから、アポリネール、ツアラ<sup>27)</sup>、ヤン・アルプ、

サンドラル、オザンファンといった「欧州レベル」の前衛芸術家（国外にも名が知られたイタリア人、有名無名の非イタリア人など）までもが『ラ・ディアーナ』に注目し、マローネと書簡を交わすようになる。

特にトリスタン・ツアラ (Tristan Tzara, 1896-1963) は、「ダダ宣言 1918」発表以前の大戦中、イタリアに活路を見出そうと、チューリッヒから半島各地の雑誌<sup>28)</sup>に積極的にアプローチしていた。他に先駆けて『ラ・ディアーナ』上で『カバレー・ヴォルテール』を紹介<sup>29)</sup>していたマローネは、彼に他の雑誌での執筆機会を斡旋する<sup>30)</sup>。しかしツアラが最終的な目標としたマリネッティとボッチョーニへの接触までにはなかなか至らなかった。ツアラのグループと、イタリア文人たちの蜜月は、「ダダ宣言 1918」と終戦をもって終わる。1920年、ツアラはパリへの移住を果たす。

このように初期のダダがイタリアを頼りにする経緯があったにもかかわらず、後発のダダがもつ否定のインパクトにより、未来派の功績がかすんでしまうと、未来派研究の第一人者リスタはかつて危惧していた<sup>31)</sup>。ただ戦後にいささか「タブー視」されがちであった未来派が研究の俎上に上がるには、未来派やダダ、そしてシュルレアリスムを含めた広い意味での「前衛」への関心が必要とされた。この枠組みのなかで、未来派の先駆性や特異性が薄まってみえたとしても、受け容れざるをえないデメリットであった。しかしその後、先に挙げたフルテン監修の未来派展といった大規模な回顧展（1986）が開かれはじめる1980年代半ば以降徐々に、未来派に対し「公平な」評価が下されていった。

当時、戦中の混迷期において、ツアラがそうであったように、各々の芸術家またはグループになんらかの明確な方向性があったわけではない。マローネと『ラ・ディアーナ』についての研究をリードしてきたダントウオーノとダンブロージョは、次の点で意見の一致をみる。ダントウオーノによれば「（『ラ・ディアーナ』と『エーコ・デッラ・クルトゥーラ』に共通した）計画的な折衷」<sup>32)</sup>があり、あるいはダンブロージョにとって「（『ラ・ディアーナ』

は) あえて折衷的で穏健な立場をとり、様々な文学傾向に開かれていた」<sup>33)</sup>のだった。

ナポリの雑誌は、いずれも前衛への意識という共通性をもつため、お互い交流を育み、同じ理由から対立もし、それぞれの立場を主張した。加えて、同人を他都市にも募った『ラ・ディアーナ』には、ナポリで進行するローカル化を阻む目的もあった。その一方、編集方針に照らし合わせてというよりも、同郷というだけで目の敵にして、『ヴェーラ・ラティーナ』や『エーコ・デッラ・クルトゥーラ』との小さな衝突を繰り返すのは、払拭できずにいるネガティブな地方性を露呈する<sup>34)</sup>。

こうしていえることは、ナポリに限ったことではないが、1910年代半ばから後半にかけて、前衛は必ずしも未来派一色に染まっていたわけではないということである。そこには個人やグループによって示されるヴァリエーションがあった。こうした状況は、若い世代の成長を援け、戦後における台頭を可能にする。その恩恵を被ったのが、たとえばウンガレッティである。前衛の熱に覆われた時代が、未来派の一元的支配を拒み、複数のグループの並存と混淆を許容したため、ウンガレッティは、いずれの集団にも染まることなく、個を磨けた<sup>35)</sup>。

また狭義の未来派側の視点からは、『ヴェーラ・ラティーナ』は『ラチエルバ』から『未来派のイタリア』(«L'Italia futurista», 1916-18)までの空白期を埋め<sup>36)</sup>、『ラ・ディアーナ』は、未来派内の二大派閥であるミラノとフィレンツェのそれが分裂するのを防ぐ役割を果たしたとされる<sup>37)</sup>。

#### 4. マローネの『ラ・ディアーナ』、カンジュッロの未来派

前衛が流行した時代が未来派一辺倒ではなかったとしても、それぞれがなんらかのかかわりを未来派と保っていた。ここからはマローネもしくは『ラ・ディアーナ』が図った未来派との間合いをみていく。それは状況次第で、狭まったり、広がったりする。まずは指導者マリネッティとの接近、次にカン

ジュッロとの距離を検討する。

開戦前夜 1915 年 1 月の『ラ・ディアーナ』創刊号から、参戦派であるマローネは、個人としても雑誌としても、未来派寄りの姿勢を明確にする。自ら用意した雑誌の冒頭に掲げる「勇者宣言」(*Il manifesto degli Ardimentosi*) の挑発的な調子は、あからさまに未来派をなぞる。「われらが未来派の新鮮なあらし」(«libeccata fresca del nostro bel futurismo») を吹かせると高らかに告げつつ、未来派の大胆不敵な行動力に連帯を示す<sup>38)</sup>。

マリネッティとの直接の交流は、創刊号から 3 ヶ月後にはじまる。ナポリの「マローネ資料館」には、マリネッティからマローネに宛てられた、『ラ・ディアーナ』の初年度にあたる 1915 年 4 月からマリネッティの晩年(1943 年)までの 9 通が収められている。まずは『ラ・ディアーナ』送付への礼や戦地からの挨拶でやりとりがはじまる。その後マローネは、マリネッティとの初会見で、デ・ロベルティス編集の『ラ・ヴォーチェ』よりも『ラ・ディアーナ』の方が上との評を受ける<sup>39)</sup>。マリネッティが好意的である裏には、マローネを未来派に取り込む意図があった。逆に、1916 年 3 月 24 日付書簡では、マリネッティはマローネに対してもどかしさを覚え、強い調子で、それまでの自らの「宣言」にあった主張を繰り返している<sup>40)</sup>。

(未来派的感性を) いかなるシNTAXにもとらわれない自由態にある語で、われわれが定めた綴りで、印刷技術を総動員して表現せねばならない (Archivio Marone di Napoli M.VIII.4; Lista 1977: 67)<sup>41)</sup>。

確かにマローネと『ラ・ディアーナ』は、方向性は近いものの、未来派に与していたわけではなかった<sup>42)</sup>。

次の皮肉なエピソードにも、この微妙な距離は影響する。上のメッセージから 1 年後に起こった出来事である。マリネッティから、「自由態にある語」で書かれた「戦況報告に横たわる婦人」(*La signora coricolata fra i comunicati*

*di guerra*) の原稿が『ラ・ディアーナ』掲載用に送られた。ナポリ「マローネ資料館」の1917年2月28日付葉書 (Archivio Marone di Napoli M.VIII.5) と、ローマ「マローネ文庫」にある1917年の2通 (1917年2月2日付と4月付、Fondo Marone di Roma 41297, 41298) は、この投稿に関する、作者からの連絡である。ここには、前年の書簡にあったマリネッティの忠言に沿った作品が届いて、ナポリでの組版に不安を覚えたマローネへの苛立ちがあらわれる。マローネの相談相手となった、マリネッティ作品の筆写と転送を任されていたアルマンド・マツァは、作者に問題を直接伝えるよう促す (1917年3月5日付書簡、Fondo Marone di Roma 41379) <sup>43)</sup>。

『ラ・ディアーナ』のための唯一のマリネッティ作「戦況報告に横たわる婦人」は、その後、『アントロジア・デッラ・ディアーナ』に掲載されたが、草稿と異なり、文字列の傾斜や交叉といった動きの欠けた簡略版となった <sup>44)</sup>。『ラ・ディアーナ』は、それまで多くの未来派詩人の作品を掲載してきたが、それらは「自由態にある語」ではなかった <sup>45)</sup>。以前に『ヴェーラ・ラティーナ』や『ラチェルバ』で「自由態にある語」を実践していた詩人たちは、マローネの雑誌においては、あくまでも自由詩の範囲に収まるよう控え目に書く <sup>46)</sup>。

マローネとマリネッティの関係は、相互に交わす敬意にもとづきながらも、それぞれが置かれている文脈のずれに不可避免的に影響される。

一方、曖昧さが無いのが、同郷の詩人フランチェスコ・カンジュッロ (1884-1973) との、互いに敵意を抱くに至る関係である。彼は未来派中心メンバーのなかで唯一のナポリ人で、今日まで同地の未来派の代名詞的存在である。1970年代末以降、このカンジュッロ研究とともにナポリの未来派と前衛の研究が進められてきた <sup>47)</sup>。カンジュッロは、1910年4月20日のナポリにおける初の「未来派の夕べ」に感銘を受け、マリネッティの一派に合流 <sup>48)</sup>、先にも触れたとおり、1915年から翌年まで『ヴェーラ・ラティーナ』のために未来派の連載を監修する。1921年にはマリネッティと連名で『驚愕の演劇』 (*Teatro*

*della Sorpresa*) を発表した。これは、「ヴァリエタ劇」(*Teatro di varietà*) と「未来派綜合演劇」(*Teatro futurista sintetico*) に続く、演劇に関する第三宣言として上梓された。

「自由態の詩人」(paroliberista, parolibero) として有名なカンジュッロの面目躍如たる詩集『ピエディグロッタ』(1916) は、マローネの書評コーナーで取り上げられる<sup>49)</sup>。2年前にローマの未来派常設劇場で、「強弱綜合発声」(*declamazione dinamico-sinottica*) によって作者が朗読した作品であった。マローネは、生で聞いた際も、あらためて詩集で読んだ際も、喜劇役に劣る出来であったと酷評する。せいぜい持ち上げうるのは、時折垣間見られる「深い苦悩」であった。後のダダに顕著な「笑い」の力が、まったくマローネには響いていない証左である。

この詩集は作者から評者に贈られたものであったが、カンジュッロとマローネのあいだでどこまで実際の交流があったかは定かではない。われわれに伝えられる書簡に2人のやりとりは残されていないためである。直接の衝突を避けるためであったのであろうが、その仲は基本的に無理解と牽制からなる。

『ラ・ディアーナ』休刊から10年以上を経て、デペーロのヴェスヴィオ火山のイラストを表紙に、未来派的なロゴも目立つ文芸誌『ヴェスヴィオ』(*«Vesuvio»*, 1928-29) にて、マローネとカンジュッロは場を共にする<sup>50)</sup>。2人の参加は主体性に欠けるものの、雑誌は1928年に地元で誕生したばかりの「全体視派」(*circumvisionismo*) の絵画を特集し、さらに翌年に立ち上がる「破壊派」(*distruttivismo*) との流れも推進する<sup>51)</sup>。これらのナポリ独自の運動は未来派が体制と同調する時代にあっても、初期未来派的な革新性をうったえるのが特徴である。実のところ、『ヴェスヴィオ』に集った新世代は1930年代に地方毎に分派する未来派の展開を先取りしている。

マリネッティとカンジュッロそれぞれとマローネが結ぶ関係は、等しく未来派が相手といえども異なり、むしろ対照的な性質をもつ。マローネとフィ

レンツェの『ラチエルバ』の一派との関係もまた異なる<sup>52)</sup>。これらの事実は、マリネッティ主導といっても未来派は決して一枚岩ではなく、外部からは運動内の個々人と個別の関係を結びうることを示している。

## 5. 結——マローネの脱前衛とクローチェへの傾倒

最後に、マローネによる「脱前衛」のプロセスも追っておかなければならない。ダンブロージョが、マローネを評して「前衛とクローチェ<sup>あいだ</sup>の間」<sup>53)</sup>と述べる時、それは2つの極をもち、振れ幅の大きい存在であることを示している。前衛からクローチェへとマローネの関心が移行するのと、雑誌『ラ・ディアーナ』休刊への流れが一致する。とはいえ『ラ・ディアーナ』創刊時においても、クローチェ語法に倣った、「詩は一なるものであり、そうであるか、そうでないかしかない」(«la poesia è unica e tale che è o non è») <sup>54)</sup>とのフレーズが創刊の辞の帰結に挿入されている(タイトルは「勇者宣言」と極めて未来派的だが)。

マローネは、脱前衛と反比例してクローチェに近づいていく。とはいえ当時『クリティカ』誌上にクローチェが連載していた「イタリアの歴史学」と『ラ・ディアーナ』との間に思想上のつながりは見つけられない。クローチェは『ラ・ディアーナ』にエッセイ3本(そのうち短か目の論考「完全と不完全」(*La perfezione e l'imperfezione*)は『アントロジャ・デッラ・ディアーナ』に再掲)を寄稿している<sup>55)</sup>。一般的に、前衛運動へのクローチェのコミットは限られている。1909年、マリネッティはクローチェに、回覧手紙の手法で、「未来派宣言」への同調もしくは意見を求めるも、クローチェは無視する<sup>56)</sup>。いわば、もともと『ラ・ディアーナ』のサークルはクローチェと結びついていて、もはや雑誌が定期刊行されなくなって久しい戦後期に、マローネがクローチェに抱く敬愛の念はますます強まり表面化する。

雑誌廃刊後も残る「ディアーナ叢書」から発表された、マローネの代表作となる文学評論集『ドゥルシネアの擁護』(1920)の頃には、詩作を止め、クロー

チェを本格的な批評の対象とする。同年、同叢書刊のアンソロジー『ベネデット・クローチェ』<sup>57)</sup>では、錚々たる執筆陣にマローネも名を連ねる（おそらくマローネとチェンティが編纂）。クローチェの歴史認識を念頭に「歴史」(*La storia*)と題した論考を載せる。それは次の一文からはじまる。

ゆえに哲学形而上学ではなく、刷新された方法論なのだ、われわれをおそう漠とした光は<sup>58)</sup>。

共著者には、クローチェ本人以外に、『ラ・ディアーナ』の初代編集長チェンティ、盟友ジョヴァンニ・ジェンティーレ、クローチェが最頁にする若手詩人アントニオ・アニーレ、ヴェテラン方言詩人サルヴァトーレ・ディ・ジャコモ、気鋭の文学史家ルイージ・ルッソがいた。

1920年代においては、イデオロギー的理由から、マローネは脱前衛へとむかう。大戦後に同郷のジョヴァンニ・アメンドラの知己を得たことが大きい。特にマッテオッティ事件後、マローネが立ち上げた政治評論誌『イル・サッジャトーレ』<sup>59)</sup>は、やはりクローチェにも近かったアメンドラの熱心な参加によって支えられていた。しかし反ファシズムで貫かれていたこの雑誌は、当局による押収が続き短命に終わる。『イル・サッジャトーレ』の歴史的意義は、近年1920年代半ばの反ファシズム系の雑誌群が注目されるなかで、今後明かされるべき課題となっている<sup>60)</sup>。

マローネは、弁護士としての活動が制限されていく1920年代から、生地ブエノス・アイレスへ亡命に近い移住を果たす1930年代初頭までを政治的に最も活発に過ごしたが、第二次大戦終結は彼地で迎える。ナポリを離れ、終戦から思想家の死(1952)の後まで<sup>61)</sup>、アルゼンチンを中心にスペイン語圏におけるクローチェの紹介に力を入れる<sup>62)</sup>。

結局のところ、前衛や未来派とのかかわりはマローネのキャリアの初期を占めるにすぎない。彼が脱前衛する頃、世の中の前衛熱にも変化がみら

れるようになる。状況がはっきりと展開するのは、戦後をむかえ、1919年発行の『ラ・ロンダ』（«La Ronda», 1919-23）がうったえる「秩序への回帰」（ritorno all'ordine）の時代の到来による。その中心人物となるエミリオ・チェッキはマローネと親しく、『日本の詩人たち』の書評から「金魚」（*Pesci rossi*）のシリーズを開始し、『ラ・ディアーナ』の「協力者」であった<sup>63</sup>。チェッキは同アンソロジーをめぐる偽作騒動（1917年後半）の際にはマローネ擁護のために奔走する<sup>64</sup>。

『ラ・ディアーナ』は、未来派的な前衛に取まり切らなかったからこそ、ウンガレッティやチェッキといった次代の人材を育む場となった。しかしかえって開かれた場が含む曖昧さゆえにこれまであまり顧みられてこなかった人物ゲラルド・マローネと雑誌『ラ・ディアーナ』を、本稿で紹介し分析した。

## 註

- 1) イタリア学会第61回大会（2013年10月19日、於富山大学）での発表「ゲラルド・マローネとナポリの前衛」原稿に加筆修正した。
- 2) ナポリ未来派の権威であるダンプロージョの論集表題『未来派とその他の前衛』（M. D'Ambrosio, *Futurismo e altre avanguardie*, Napoli, Liguori, 1999）にもあるとおり、特にダダ、それに後続のシュルレアリスムとあわせて論じられる。
- 3) カタログ *Futurismo e futurismi*, catalogo della mostra (Venezia, Palazzo Grassi, 30 aprile-5 novembre 1986), a cura di P. Hulten, Milano, Bompiani, 1986.
- 4) カタログ *Futurismi*, catalogo della mostra (Aosta, Centro Saint Bénin, 28 novembre 2008-26 aprile 2009, a cura di C. Rebeschini e E. Di Martino, Milano, Skira, 2009.
- 5) マイナーな未来派に注目しつつ、新しい未来派像の可能性や、未来派の複数性を求めていく研究については次を参照。P. Thea, *Nuove Tendenze. Milano e l'altro Futurismo*, Milano, Electa, 1980; A. L. Giannone, *Futurismo e dintorni*, Galatina, Congedo, 1993; M. D'Ambrosio, *Futurismo e altre avanguardie*, cit.; W. Bohn, *Other Futurism: Futurist Activity in Venice, Padua, and Verona*, University of Toronto Press, 2004. 近年、次に挙げるような未来派「人物記」により、さらに広く人脈が掘り起こされている。D. Cammarota, *Futurismo: bibliografia di 500 scrittori italiani*, Milano, Skira, 2006.
- 6) 太田の研究においては、航空画家ドットーリの独自性が論じられる（太田岳人「ファ

シズム期の未来派における空間と表象—ジェラルド・ドットーリを中心に—、『空間と表象』、千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書第259集、上村清雄編、2013年、173-187頁）。太田の別の論考では、同じく後期未来派に参画した女性彫刻家レジーナを紹介しつつ、未来派研究に新たにジェンダー的視点を持ち込む（太田岳人「1930年代の〈第二未来派〉とレジーナ」、『身体/表象—通文化史的研究—』、千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書第213集、池田忍編、2011年、45-53頁）。実際、未来派の女性芸術家を掘り起こす試みについては次を参照。*Futuriste. Letteratura. Arte. Vita*, a cura di G. Carpi, Roma, Castelvecchi; C. Bello, *Scrittrici della prima avanguardia. Concezione, caratteri e testimonianze del femminile nel futurismo*, Firenze, Le Lettere, 2012; M. Bentivoglio e F. Zoccoli [a cura di], *Le futuriste italiane nelle arti visive*, Tivoli, De Luca Editori d'Arte, 2008.

- 7) カタログ *5 febbraio 1909: Bologna avanguardia futurista*, catalogo della mostra (Bologna, Casa Saraceni, 5 febbraio 2009-30 aprile 2009), a cura di B. Buscaroli Fabbri, Bologna, Bononia University Press 2009. 前年までもポローニャで同様の展覧会「未来派航空絵画」が催されており、カタログは次の通り。B. Buscaroli Fabbri, *Aeropittura futurista: Angelo Caviglioni e gli altri protagonisti*, catalogo della mostra (Bologna, Casa Saraceni, 16 novembre 2007-20 gennaio 2008), Bologna, Bononia University Press, 2007.
- 8) 未来派の地域性にこだわる研究や、「ご当地」未来派研究は無数にあるが、ナポリとカンパーニア州以外の南部諸州の未来派については次を参照。C. Barbato e A. Masi, *Aspetti del futurismo in Italia e in Sardegna*, Ariccia, Aracne, 2011; *Futurismo in Sicilia*, catalogo della mostra (Taormina, 27 maggio-16 ottobre 2005), a cura di A. M. Ruta, Milano, Silvana, 2005; L. Tallarico, *Il futurismo e la Calabria*, Reggio Calabria, Iiriti, 2003; *Verso le avanguardie. Gli anni del futurismo in Puglia (1909-1944)*, catalogo della mostra (Bari, 20 giugno-30 agosto 1998; Taranto, 5 settembre-1 novembre 1998), a cura di G. Appella, Bari, Adda, 1998.
- 9) ポストヴォーチェ派とは、雑誌『ラ・ヴォーチェ』（«La voce», 1908-16年の第1期のうち、プレッツォリーニが編集にあたった1911年まで）がイタリア全体でおさめた成功ののちにあらわれてくる、地域毎に分岐した雑多な動きのことである。ナポリの未来派と前衛に関しては次を参照。*Futurismo a Napoli 1933-1935: documenti inediti*, a cura di L. Caruso, Napoli, Colonnese, 1977; E. Crispolti, *Futurismo e meridione*, Napoli, Electa, 1996; M. D'Ambrosio, *Nuove verità crudeli. Origini e primi sviluppi del Futurismo a Napoli*, Napoli, Alfredo Guida 1990; *Futurismo a Napoli*, atti del convegno di studi (Napoli, Istituto Italiano per gli Studi Filosofici, 26-28 novembre 1990), a cura di M. D'Ambrosio, Napoli, Morra 1995; *Futurismo a Napoli: indagini e documenti*, a cura di M.

- D'Ambrosio, Napoli, Liguori, 1995; *I circumvisionisti: un'avanguardia napoletana negli anni del fascismo*, a cura di M. D'Ambrosio, Napoli, CUEN, 1996; *Marinetti e il Futurismo a Napoli*, catalogo della mostra (Biblioteca Nazionale di Napoli, 6 maggio-6 giugno 1996), a cura di M. D'Ambrosio, Roma, Edizioni De Luca, 1996; N. D'Antuono, *L'«Eco della cultura», «La Diana» e il Futurismo*, in «Forum Italicum», XXVII, 1-2, 1993, pp. 147-177 (versione ridotta in M. D'Ambrosio, *Futurismo a Napoli*, cit., pp. 111-130).
- 10) さらにマローネが会長を務めたブエノス・アイレスのダンテ協会 (Asociación Dante Alighieri) にも資料が残るが、未整理である上、2000年の建物の改装によって、保管する環境が悪化したとの報告がある (アレッサンドラ・チェントウレツリ氏の準備中の博士論文より)。今や残っているのは印刷本のみとの情報もある。Cfr. A. Patat, *Un destino sudamericano. La letteratura italiana in Argentina [1910-1970]*, Perugia, Guerra, 2005, p. 181; G. Ungaretti, *Da una lastra di deserto. Lettere dal fronte a Gherardo Marone*, a cura di F. Bernardini Napoletano, Milano, Mondadori, 2015.
- 11) マローネ (さらに雑誌『ラ・ディアーナ』) については、今まで約半世紀間、細く長く研究が続いている。1962年に亡くなった後の回顧シンポジウムと論集出版 (*Gherardo Marone 1891-1962*, a cura di A. Marone, Napoli, La Buona Stampa, 1969)、処女詩集をまとめる前後のウングレツティからマローネへの書簡集 (G. Ungaretti, *Lettere dal fronte a Gherardo Marone [1916-1918]*, a cura di A. Marone, introduzione di L. Piccioni, Milano, Mondadori, 1978)、伝記と作品評からなる初のモノグラフィー (N. D'Antuono, *Avventura intellettuale e tradizione culturale in Gherardo Marone*, Napoli, Laveglia, 1984)、ナポリの「マローネ資料館」開設 (1995) を記念したマローネについての研究報告集と論集出版 (AA.VV., *Gherardo Marone*, atti del convegno di studi [Napoli, 15 maggio 1995], Napoli, Macchiaroli, 1996; AA.VV., *Dedicato a Gherardo Marone*, Napoli, Macchiaroli, 1996)、同資料館所蔵資料を用いた2011年の展覧会「ゲラルド・マローネとナポリの未来派」とカタログ (E. Bufacci e S. Zoppi Garampi, *Gherardo Marone e i futuristi a Napoli*, Napoli, Macchiaroli, 2011)、『ラ・ディアーナ』同人の詩人リオネッロ・フィウーミとの文通 (*Gherardo Marone a Lionello Fiumi: lettere [1915-1918]*, a cura di S. Arena, Verona, Della Scala, 2003; L. Fiumi, *Lettere a Gherardo Marone*, a cura di M. Giancaspro e S. Gallifusco, Napoli, Macchiaroli, 2011)、そして2013年には政治誌『イル・サジヤトーレ』(«Il saggiaiore», 1924-25) 編纂期のマローネに焦点を絞ったモノグラフィー (S. Zoppi, *Una battaglia per la libertà. «Il Saggiaiore» di Gherardo Marone (Napoli 1924-1925)*, Soveria Mannelli, Rubbettino, 2013) が続いた。『イル・サジヤトーレ』のリプリント版 G. Marone, *Il saggiaiore. Rassegna quindicinale di problemi politici e morali*, reprint, Napoli, Macchiaroli, 1994。『ラ・ディアーナ』については、アンソロジー (A. Dei, «La Diana» [1915-1917]: saggio e

*antologia*, Roma, Bulzoni, 1981) とリプリント版 («La Diana», ristampa anastatica, a cura di N. D'Antuono, Cava dei Tirreni, Avagliano, 1990) が揃っている。

- 12) リプリント版 G. Marone, *Antologia della Diana [1917-1918]*, reprint, Napoli, Macchiaroli, 1990. 1917年から翌年にかけて用意された、当時を代表する文人の詩、散文、評論からなるアンソロジーで、体裁と構成は1915年に1巻のみ編まれた『ヴォーチェ』版アンソロジーである『ヴォーチェ年鑑』(*L'almanacco della Voce*)に似る。雑誌の発行が止んだ後も、1930年代前半まで、「デアーナ叢書」(Libreria della Diana)と名付けられた叢書と出版社が続いていた。これも「ヴォーチェ叢書」(Libreria della Voce)と似た発想である。
- 13) マローネのバイオグラフィーについては次を参照。土肥秀行「下位春吉とゲラルド・マローネーナポリにおける文学的交歓」、『イタリア圖書』第48号、2013年4月、5頁、註3、AA.VV., *Gherardo Marone*, cit., pp. 10-14.
- 14) 1995年、ナポリのスオル・オルソラ・ベニカーザ学院でのマローネについてのシンポジウム「ゲラルド・マローネ」は、副題に「イタリアとアルゼンチンをまたぐ文化大使」と掲げた。ブエノス・アイレスに生まれ幼少期を過ごし、ナポリで高等教育を受けた「バイリンガル」のマローネは、伊語と西語間で、双方向の翻訳を行っている。カルデロン・デ・ラ・バルカ『人生は夢』(*Calderón de la Barca, La vita è sogno*, Napoli, L'editrice italiana, 1920)、セルバンテス『ドン・キホーテ』(*Miguel de Cervantes, Don Chisciotte della Manciania* [trad. parziale], Napoli, Casella, 1924; [trad. completa], Torino, Utet, 1954)、グラシアン『処世神託』(*Baltasar Gracián, Oracolo manuale e arte di prudenza*, Lanciano, Carabba, 1930) ロペ・デ・ベガ戯曲集(Lope de Vega, *La stella di Siviglia-Le bizzarrie di Belisa*, Torino, UTET, 1933) などスペイン文学の古典を中心に数多くの翻訳を残した。1950年代半ば(1954-56)にはポローニャ大学でスペイン文学の講座を担当した。また1938年以降に正規教員としてイタリア文学を教えたブエノス・アイレス大学では、イタリア研究叢書を戦中に立ち上げた。彼地では、1951年に自ら創始したアルゼンチン・ダンテ学会(Sociedad Argentina de Estudios Dantescos)や、会長を務めたダンテ協会を通してイタリア文学と文化の研究と普及に大きく貢献し、アルゼンチンにおけるイタリア系文化人の筆頭に挙げられるようになる。西語訳には、ボッカッチョ選集(*G. Boccaccio, Decamerone e brani di opere minori*, Ed. Università di Buenos Aires, 1944)、ペトラルカ選集(*F. Petrarca, Italia mia: antologia di poesie del Petrarca*, Ed. Università di Buenos Aires, 1945)など、やはり文学史的価値の高い作品が並ぶ。また西訳『神曲』を注釈する(Dante Alighieri, *La Divina Comedia*, traducción de B. Mitre, estudio preliminar y notas de G. Marone, Buenos Aires, Estrada, 1946)。
- 15) 下位とダヌンツィオについては次を参照。H. Doi, *Mori Ōgai e Gabriele D'Annunzio*:

- interscambi letterari nel primo Novecento giapponese*, 『往還と横断と 地域文化研究から 総合国際学へ』 東京外国語大学、2010年、725-729頁、および Id., *Harukichi Shimoi e l'avanguardia napoletana*, in *Ricerca, scoperta, innovazione: l'Italia dei saperi*, a cura di M. K. Gesuato, Istituto Italiano di Cultura – Tokyo, 2014, pp. 43-51.
- 16) 後に処女詩集にも収められたウンガレッティの詩「砂漠のリンドーロ」(*Lindoro di deserto*)に『ヴォーチェ』(1916年3月31日号)で目を留めたマローネは前線の詩人に手紙を書き、まずは文通がはじまる(M. D'Antuono, *Nuove verità crudeli*, cit., p. 25)。マローネの呼びかけにより、「沈黙する」決意を固めていたウンガレッティは再び詩作に向かう(G. Ungaretti, *Lettere dal fronte*, cit., p. 42)。まもなく『埋もれた港』の自費出版計画を、誰よりも先にマローネに相談する(ivi, pp. 48-49)。
- 17) G. Ungaretti, *Lettere dal fronte a Gherardo Marone*, cit. この新校訂版が、イタリアの第一次世界大戦参戦から1世紀にあたる2015年に、ローマの「マローネ文庫」の責任者であるベルナルディーニによってまとめられた(G. Ungaretti, *Da una lastra di deserto. Lettere dal fronte a Gherardo Marone*, cit.)。こうしてウンガレッティによって大戦中に送られたマローネ宛書簡集は、戦争文学としても認められるに至っている。
- 18) *Poesie giapponesi*, a cura di G. Marone e H. Shimoi, Napoli, Ricciardi, 1917。マローネと下位の共同作業については次を参照。土肥秀行「下位春吉とナポリの文芸誌『ラ・ディアーナ』—下位春吉伝(上)」、『イタリア圖書』第39号、2008年10月、11-17頁、「下位春吉とナポリの文芸誌『サクラ』—下位春吉伝(下)」、『イタリア圖書』第40号、2009年4月、2-8頁、*Shimoi Harukichi e due riviste napoletane*, in *Giappone e Italia: le arti del dialogo*, a cura di T. Wada e M. Casari, Bologna, Emil, 2010, pp. 55-60、前掲「下位春吉とゲラルド・マローネ—ナポリにおける文学的交歓」、「下位春吉とは何者か—一九三五年の現代日本詩撰—「ファズム文学」とは」、『日伊文化研究』第53号、2015年、2-12頁。
- 19) マローネと下位側がまとめている一覧によると24本である(H. Scimoi [sic], *La guerra italiana*, Napoli, Libreria della Diana, 1919, 99-101)。これにパリで発表されたもう1本の書評を加えておきたい(P. Albert-Birot, *Poésie japonaise*, in «sic», 2, 22 septembre 1917, pp. 10-11)。
- 20) 土肥、前掲「下位春吉とゲラルド・マローネ—ナポリにおける文学的交歓」、2頁。
- 21) ウンガレッティへの日本の詩の影響の有無については次を参照。A. Suga, *Ungaretti e la poesia giapponese*, in *Atti del convegno internazionale su Giuseppe Ungaretti* [Urbino, 3-6 ottobre 1979], a cura di C. Bo, M. Petrucciani, M. Bruscia, M.C. Angelini, E. Cardone e D. Rossi, Urbino, 4venti, 1981, vol. II, pp. 1363-1367 および土肥秀行「初期ウンガレッティと20世紀の短詩形」、『イタリア学会誌』第61号、2011年、195-

216 頁。

- 22) *Lirici giapponesi*, a cura di G. Marone e H. Scimoi [sic], Lanciano, Carabba 1927. ランチャーノ市のカラッパ社刊日本詩アンソロジーは、同社内で、ロシア版『黄金時代のロシア叙情詩人たち』(*Lirici russi del secolo aureo*, 2 voll., a cura di G. Gandolfi, 1925) フランス版『フランス詩人たち - 15世紀から現代までの主なフランス叙情詩人たちのイタリア版アンソロジー』(*Poeti di Francia: antologia italiana dei maggiori lirici francesi dal 1400 ai nostri giorni*, a cura di M. Spiritini, 1927, 1929) やポルトガル版『現代のポルトガル叙情詩人たち』(*Lirici portoghesi moderni*, a cura di G. Battelli, 1929) と共に、叢書というはっきりしたかたちではないものの、lirici シリーズを構成した。“lirici” は、20世紀という「現代」ならではの叙情詩人たちを言いあらわし、1920年代から戦中までもてはやされた語である。共にミラノの「コッレンテ叢書」(Edizioni di «Corrente») から発行されることになる、サルヴァトーレ・クワジーモドが翻訳・編集した『ギリシャの叙情詩人たち』(*Lirici greci*, a cura di S. Quasimodo, 1940) や、カルロ・ボが編纂した『スペインの叙情詩人たち』(*Lirici spagnoli*, a cura di C. Bo, 1941) へと受け継がれていくネーミングは、外国文学のエキスパートであるカラッパ社ならではの発想であった。1940年のクワジーモドによるギリシャ古典詩の翻訳は戦後のエルメティズモだけでなく詩壇全般に大きく影響を与え、今日もなお名声を留める。
- 23) L. Granieri, *La rivista Eco della cultura e la letteratura giapponese*, in *Italia-Giappone 450 anni*, a cura di A. Tamburello, Istituto Italiano per l’Africa e l’Oriente, Roma-Università degli Studi di Napoli “L’Orientale”, 2003, p. 377.
- 24) リプリント版 *Vela latina. Pagine futuriste delle annate 1915-1916*, a cura di S. M. Martini, Firenze, SPES, 1979.
- 25) フィウーミの処女詩集『花粉』の巻頭に添えられた「新自由派宣言」(Appello neoliberista) が転機となる (L. Fiumi, *Pölline*, Milano, Studio editoriale lombardo, 1914, pp. 7-13)。この付記は当初「前衛主義」(*Avanguardismo*) と題される予定であった (M. D’Ambrosio, *Futurismo e altre avanguardie*, cit., p. 145, n. 35)。「新」が付されているのは、未来派の誕生と同時期にフィレンツェのセッティメッリらが唱えた自由詩運動である「自由派」(*liberismo*) の再興をねらったのである。元の運動は数年で未来派に吸収された。「自由派」や「新自由派」と同種の、未来派から距離をとる前衛を目指す試みが各地でみられた (G. Lista, *Liberismo, dada, immaginismo. Riviste d’avanguardia in Italia*, in *Dada. L’arte della negazione*, a cura di R. Siligato, Roma, De Luca Editori d’Arte, 1994, pp. 134-135)。
- 26) D. Cammarota, *Futurismo: bibliografia di 500 scrittori italiani*, cit., p. 114.
- 27) ツアラとマローネは、1916年にナポリから越した先のボローニャで未来派入り

を果たしたばかりのメリアーノを介してつながる (G. Lista, *Dada in Italia*, in *Dada. L'arte della negazione*, cit., p. 110)。1917年から18年にかけてマローネからツアラに宛てられた書簡6通が確認できる (G. Lista, *De Chirico et l'avant-garde*, Lausanne, L'Age d'Homme, pp. 144-150)。ツアラからマローネに宛てられたものは3通、ローマに保管されている (Fondo Marone di Roma 42250-2)。この3通のうち最も早い1917年2月6日便には、『ラ・ディアーナ』との提携をねらい、サンドラル、オザンファン、アポリネールの住所を伝えて便宜を図る。また前年に出た雑誌『カバレー・ヴォルテール』(«Cabaret Voltaire»)について説明する (Fondo Marone di Roma 42250)。1916年5月24日号のみで終わるこの雑誌から、1917年7月にはじまる雑誌『ダダ』(«Dada»)へ、運動の場は引き継がれる。

- 28) ツアラが関係をもった雑誌には未来派系と言いきれないものも含まれている。1910年代後半のイタリア各地における雑誌文化が、それだけ豊かであったということである。「La brigata」(発行地ボローニャ、メリアーノ主宰)、「Le pagine」(まずラクイラそれからナポリ、モスカルデッリとマリア・ダレッツォ主宰)、「Noi」(ローマ、ライモンディ主宰)、「Avanscoperta」(ローマ、プランボリーニ主宰)、「Crociera barbare」(カゼルタ、マローネほか編集)、「La fonte」(カターニア、ヴィッラロエル主宰)、「Cronache letterarie」(ローマ、アウロ・ダルバ主宰、マローネほか編集参加)等。これらの雑誌の同人は、しばしば協力関係にあった。
- 29) «La Diana», II, 11-12, novembre-dicembre 1916, p. 216. このときまだマローネは『カバレー・ヴォルテール』の実物を目にはいなかった (1917年3月19日付マローネよりツアラ宛書簡 G. Lista, *De Chirico et l'avant-garde*, cit., p. 147)。
- 30) 1917年8月付マローネよりツアラ宛書簡 (ivi, pp. 147-148)。
- 31) G. Lista, *Dada in Italia*, cit., p. 109.
- 32) N. D'Antuono, *L'«Eco della cultura»*, «La Diana» e il Futurismo, cit., p. 152.
- 33) N. D'Ambrosio, *Futurismo e altre avanguardie*, cit., p. 143.
- 34) どの雑誌も参戦にむけて論陣を張るが、ニュアンスの違いをめぐって中傷合戦を起こす。『ディアーナ』が他の2誌と交えた論争、すなわち『エーコ・デッラ・クルトゥーラ』とのもの (N. D'Antuono, *Avventura intellettuale e tradizione culturale in Gherardo Marone*, cit., pp. 30-31)、『ヴェーラ・ラティーナ』とのもの (ivi, pp. 27-29; G. B. Nazzaro, *Il Futurismo in "Vela latina"*, in *Futurismo a Napoli*, cit., p. 91, n. 5; A. Striano, «La Diana» di Gherardo Marone e il Futurismo, in «Sinestesia», 8, 2010, pp. 162-165)があり、それぞれ後年再構成されている。
- 35) ウンガレッティは1916年3月の『ラチェルバ』デビュー以後は、一貫して『ラ・ディアーナ』に作品を発表し続け、同年末の処女詩集に至った。未来派との一定の距離が、語彙・語法の異なる独自のスタイルを作るのに必要であった。

- 36) M. D'Ambrosio, *Futurismo e altre avanguardie*, cit., p. 144, n. 27; G. B. Nazzaro, *Il Futurismo in "Vela latina"*, cit., p. 89.
- 37) G. Lista, *Liberismo, dada, immaginismo. Riviste d'avanguardia in Italia*, cit., p. 134.
- 38) 創刊号の記事「切れ目」(*La barra*, in «La Diana», I, 1, gennaio 1915, p. 18) より。後年の評論においても、未来派に肯定的な意見を表明し、イデオロギー的には反対であったファシズム体制下、未来派が実質的な公式芸術となっても、その姿勢は変えなかった。Cfr. G. Marone, *Difesa di Dulcinea*, Napoli, Libreria della Diana, 1920, pp. 53, 153; Id., *Pane nero*, Lanciano, Carabba, 1934, p. 109) .
- 39) 1916年1月頃の手紙で、マローネはフィウーミに報告する。Cfr. *Gherardo Marone a Lionello Fiumi: lettere (1915-1918)*, cit., p. 58.
- 40) すでに1913年の宣言「シntaxの破壊 脈略なき想像 自由態にある語」(*Distruzione della sintassi / Immaginazione senza fili / Parole in libertà*, in F.T. Marinetti, *Teoria e invenzione futurista*, a cura di L. De Maria, Milano, Mondadori, 1968, pp. 65-80) の要点としてあらわれている。
- 41) いくつかの先行研究においても扱われてきた有名な書簡である。Cfr. G. Lista, *Marinetti et le futurisme*, Lausanne, L'Age d'Homme, 1977, p. 67; A. Dei, "La Diana" (1915-1917): *saggio e antologia*, cit., p. 13; A. Striano, "La Diana" di Gherardo Marone e il Futurismo, cit., p. 158.
- 42) そもそも『ラ・ディアーナ』を未来派と割り切つてしまえないのは、その他の傾向の詩人も参加していたからである。サーバ (Umberto Saba, 1883-1957)、オノーフリ (Arturo Onofri, 1885-1928)、モレッティ (Marino Moretti, 1885-1979)、ボルジェーゼ (Giuseppe Antonio Borgese, 1882-1952)、レーボラ (Clemente Rebora, 1885-1927)、ペーア (Enrico Pea, 1881-1958) らは、マローネらと比べて10歳ほど上の世代である。つまり1880年代半ばに生まれた少し上の世代とも、『ラ・ディアーナ』の中核グループはつながっていた。
- 43) ナポリに保管されている6枚の手稿 (Collezione R. e R. Marone 所蔵、画像 *Marinetti e il Futurismo a Napoli*, cit., p. 24; E. Bufacci e S. Zoppi Garampi, *Gherardo Marone e i futuristi a Napoli*, cit., pp. 130-132) は、これまでマリネッティ本人の手によるものとされてきたが (*Marinetti e il Futurismo a Napoli*, cit., p. 132; *Futurismo e altre avanguardie*, cit., p. 156, n. 88)、実際はそうではなく、筆跡からも明らかのようにマッツァによる書写版である。
- 44) この詩についての最後の連絡となるマリネッティからマローネ宛書簡 (1917年4月、Fondo Marone di Roma 41298) は「で、ゲラは？」(«E le bozze?») で締めくくられる。戦地からの手紙であるが、出版までに作者が実際ゲラを確認できたかは疑わしい。

- 45) 『ラ・ディアーナ』初年度(1915年)に多くの詩や評論を発表し中心的な役割を果たしたメリアーノ(『ラチェルバ』に寄稿するなど、20歳未満であっても経験豊富)を筆頭とし、ブツツイ(2篇、加えて『アントロジア・デッラ・ディアーナ』にも1篇)やマツツァ(2篇、『アントロジア...』にも1篇)といったマイナーな若手、さらに未来派のなかでは別格のフォルゴレ(2篇、『アントロジア...』にも2篇)とゴヴオーニ(6篇、『アントロジア...』にも4篇)がいる。
- 46) メリアーノの詩「推論と分析」(*Ipotesi ed analisi*, in «La Diana», I, 12, 15 settembre 1915, p. 213)には若干フォントの工夫がみられる。
- 47) Cfr. *Futurismo a Napoli 1933-1935*, cit.; M. D'Ambrosio, *Nuove verità crudeli*, cit.; V. Bonito, *Francesco Cangiullo: Vesuvio e Futurismo*, Napoli, Cassino, 1998. 1990年のシンポジウム『ナポリの未来派』(*Il Futurismo a Napoli*)では多くがカンジュッロについて触れた。Cfr. G. Agnese, *Marinetti a Napoli*, in *Futurismo a Napoli*, cit., pp. 13-18; M. Verdone, *Cangiullo poeta*, in *Futurismo a Napoli*, cit., pp. 33-44; G. Lista, *Cangiullo tra parola, segno e immagine*, in *Futurismo a Napoli*, cit., pp. 45-66; U. Piscopo, *Cangiullo prosatore*, in *Futurismo a Napoli*, cit., pp. 67-82; M. Stazio, *Francesco Cangiullo fra avanguardia e industria culturale*, in *Futurismo a Napoli*, cit., pp. 83-88; G. B. Nazzaro, *Il Futurismo in "Vela latina"*, cit. 次いで1996年の展覧会「マリネッティとナポリの未来派」(*Marinetti e il Futurismo a Napoli*)でもカンジュッロがもう1人の主役であった。Cfr. M. Verdone, *Francesco Cangiullo*, in *Marinetti e il Futurismo a Napoli*, cit., pp. 67-88; G. Lista, *Francesco Cangiullo e la teatralità futurista*, in *Marinetti e il Futurismo a Napoli*, cit., pp. 89-98.
- 48) M. D'Ambrosio, *Nuove verità crudeli*, cit., capp. IV, V, VIII, XI. これらのうち、第4章を除いた3章にわたって、カンジュッロの初期の活動が詳細に記録される。
- 49) F. Cangiullo, *Piedigrotta*, Milano, Edizioni futuriste di «Poesia», 1916. 書評«La Diana», II, 9-10, settembre-ottobre 1916, p. 196.
- 50) マローネはレナート・セツラ論(*Renato Serra*, in «Vesuvio», I, 12, 1928, pp. 3-5)で初寄稿する。これが1920年の評論集『ドウルシネアの擁護』でのセツラの書評(G. Marone, *Difesa di Dulcinea*, cit., pp. 159-160)の再提起であるように、回顧的な態度でマローネは臨む。もっとも、「回顧的」なのは雑誌『ヴェスヴィオ』の一般的な傾向でもある。
- 51) *Francesco Cangiullo e il Futurismo a Napoli*, a cura di L. Caruso, Firenze, SPES, 1979, pp. 12, 15 (n. 16), 71-82; S. Lambiase, “Clackson”, “Vesuvio” e il Futurismo, in *Futurismo a Napoli*, cit., pp. 131-136; U. Piscopo, *Futurismo e Circumvisionismo*, in *Futurismo a Napoli*, cit., pp. 233-236; *Futurismo a Napoli: indagini e documenti*, cit., pp. 109-147.
- 52) マローネはパピーニに深い敬愛の念を抱く。Cfr. *Gherardo Marone a Lionello Fiumi*:

*lettere (1915-1918)*, cit., p. 93.

- 53) *Marinetti e il Futurismo a Napoli*, cit., p. 39.
- 54) *Il manifesto degli Ardimentosi*, in «La Diana», I, 1, gennaio 1915, p. 2.
- 55) 後にクローチェとマローネのあいだでは、思想上というよりも家族間の付き合いの方が深くなる。クローチェの四人娘のうち、長女エレナ・クローチェ (Elena Croce, 1915-94) はマローネと『ラ・ディアーナ』同人フィオリーナ・チェンティに導かれ詩人となった。Cfr. M. D'Ambrosio, *Futurismo e altre avanguardie*, cit., p. 149, n. 9. 次女アルダ・クローチェ (Alda Croce, 1918-2009) は、マローネの影響もあつてか、スペイン詩の研究者となった。
- 56) M. D'Ambrosio, *Nuove verità crudeli*, cit., p. 48; A. Trione, *Croce e il Futurismo*, in *Futurismo a Napoli*, cit., pp. 27-32.
- 57) AA.VV., *Benedetto Croce*, Napoli, Libreria della Diana, 1920.
- 58) Ivi, p. 39.
- 59) ガリレオによる反駁の書『賈金鑑識官』(1623)に倣う。
- 60) 『イル・サッジャトーレ』の協力者に、1920年代に入って法曹を目指したマローネの弁護士仲間ジョヴァンニ・ナポリターノがいる。その息子は、共和国大統領となるジョルジョであり、マローネは彼の「名付親」であった。弁護士としてのマローネは、ナポリターノと共に、政権の迫害を受けていたアメンドラ他反体制の政治犯を擁護し (cfr. *Contro il fascismo nel Mezzogiorno. Lotta politica nel Salernitano [1919-1925] nella corrispondenza con Benedetto e Gherardo Marone*, a cura di A. Marone, Napoli, Storia di Napoli e della Sicilia, 1978)、1933年公現祭のサレルノ近郊モンテ・サン・ジャコモ (マローネの本家) における農民デモ制圧時の虐殺を生き延びた者の側に立った。Cfr. P. Laveglia, *Fascismo, antifascismo e resistenza nel salernitano: episodi di dimostrazioni e rivolte popolari durante la dittatura*, in *Mezzogiorno e fascismo*, atti del convegno nazionale di studi promosso dalla Regione Campania [Salerno-Monte S. Giacomo, 11-14 dicembre 1975], a cura di P. Laveglia, Napoli, Edizioni Scientifiche Italiane, 1978, p. 396.
- 61) この期間にマローネとクローチェが、大陸を隔てて交わした文通が再構成されている。Cfr. M. D'Ambrosio, *Futurismo e altre avanguardie*, cit., pp. 174-177.
- 62) B. Croce, *Veinte años de lucha: contra el fascismo y el comunismo*, a cura di G. Marone, Buenos Aires, Editorial Inter-americana (scritti degli anni 1927-39); B. Croce, *Estetica in nuce*, a cura di G. Marone et al., Buenos Aires, Editorial Inter-americana (ed. orig.: *Aesthetica in nuce*, Bari, Laterza, 1943); G. Marone, *Ensayo sobre el pensamiento de Croce*, Buenos Aires, Instituto de Estudios Italianos, Biblioteca «Miguel Caviglia», 1946; Id., *Benedetto Croce 1866-1952*, Buenos Aires, Instituto de Literatura Italiana (Universidad de

Buenos Aires, Facultad de Filosofía y letras), 1954; *Epistolario Croce-Vossler*, traducción de E. Manassero, prólogo de G. Marone, Buenos Aires, Kraft, 1956. ナポリにおいても一周忌に、ガエターノ・マッキアローリと共に、「Napoli antica」誌上でクローチェ特集を組む（表紙が AA.VV., *Gherardo Marone*, cit., fig. 25 に）。

- 63) 寄稿はせずに終わったが、創刊2年目の1916年に出された3号分に「協力者」(collaboratori)として記されるようになった(1月25日付1号、8月31日付8号、9-10月9-10号)。
- 64) 次の論文全体において、チェッキのサポートの様子が描かれる。土肥、前掲「下位春吉とゲラルド・マローネーナポリにおける文学的交歓」。

( どれい ひでゆき / 2015 年度原稿 )